SURE 静岡大学学術リポジトリ
Shizuoka University REpository

ミヒャエル・エンデ著『モモ』の世界構造について

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2008-01-25 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 小林, 良孝 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.14945/00000448

ミヒャエル・エンデ著
『モモ』の世界構造について

小　林　良　孝

物語『モモ』には、『時間泥棒と盗まれた時間を人間に取り返してくれた子供についての不思議な物語』という副題がついている。

確かにこの物語は、不思議な物語りである。まず、登場人物に不思議な人物が多い。何と言ってもこの物語の主人公モモはきわめて不思議な人である。モモに敵対する主人公灰色の男たちも、モモに負けず劣らず不思議な人物である。モモの庇護者マイスター・ホラ、これはもはや完全にこの世の存在ではない不思議も不思議、本当に不思議な登場人物である。モモの親友中の親友であるジジにしろベッポにしろ、やはり不思議な人である。少なくとも、平凡な人ではない。

不思議なのは登場人物だけではない。物語の中では、これらの不思議な人々は全員、ある事件に巻き込まれて行く。その事件の核心にあるのは「時間」である。一体、時間とは何か？　これについては、エンデ自身が次のように言っている。

> 重大ではあるけれども、きわめて日常的な秘密が一つあります。人間は誰もがそれに関与していて、誰もがそれを知ってはいるのです。しかしそれについて考える人はごくごく少数なのです。大多数の人々はそれを単にそのまま受け取っているだけで、それについては全然不思議には思っていないのです。この秘密とは時間なのです。(1)

時間とは、全ての人々が日常的に持っているものなのに、時間とは何かと、正面きって問う人はきわめて少ないのである。そしてもし問われれば、この問に答えることは、まじめに考えればまじめに考える程、ますますむずかしくなる、実に不思議なものなのである。それと同様に「時間を盗まれる」とか、「盗まれた時間を取り返す」とかいうことも、ことの真相の解明はとてもむずかしい事件であり、「時間の花」とか、盗まれて殺された時間の「葉巻きたばこ」とかのいろいろな不思議な物と関連している。そして「マイスター・ホラ」とか

「灰色の男たち」とかの不思議な人物とも関連している実に不思議な事件なのである。

また、この物語が展開される場所も、不思議さに満ちている。この物語によれば、主人公モモが最初に登場した所は、古代に都市として繁栄し、そして現在に到るまで発展し続けている大都会の南の郊外、考古学な価値もなく、人々に忘れ去られ、訪れて来る観光客などほとんど居ない、小さな古代の屋外円形劇場の廃墟となっている。この物語の中にはこれ以上の説明はない。しかし、子安美知子著『エンデと語る』(朝日新聞社) の10ページによれば、この物語はイタリアのローマに対する捧げものであると、エンデ氏自身により明言されている。

ではローマ市の南の郊外に、これに該当するような古代遺跡は実在するのだろうか。実地調査をしたわけではないけれども、 ── そんなことをしたらエンデはあの世で大笑いするであろう ── 観光地図を見たくらいでは、それらしき所は見あたらない。それは当然だ。そこは何の観光価値もない所だと、はっきりと書いてあるのだから。いや、たとえそういう古代遺跡の円形劇場が実在するとしても、モモの住みついたこの廃墟はやはり不思議な空間なのである。不思議なのはモモが住みついたこの廃墟だけではない、この物語でモモがたどる〈いちどもない小路〉という名称の小路も、その小路のむこうの〈どこにもない館〉という名称の家も、更にそのむこうの世界の、えも言えぬ程美しい「時間の花」が生じ・咲き・散る「池」も、益々不思議な所である。

以上のように、この物語は不思議さに満ち満ちている。しかし、これらの数々の不思議な登場人物の関係にも、数々の不思議な空間・場所の関係にも、極めて明確で強固な秩序と構造が秘められているのである。『モモ』はファンタジック・ロマンであって、理論を論理として展開する学術書ではない。従って、この物語の基本構想はかくかくしかじかで、それを展開した構造はかくかくしかじかになっていますと、物語の中でエンデ自身が説明することはほとんどあり得ない。それはエンデがすごくきらっていることなのだ。それを秘密のうちに、なるべくそれと気づかせずに物語として展開しながら、読者を物語の中へ引きずり込み、手に汗握らせることこそ、エンデの本領というものである。それなのに、ああそれなのに、エンデが秘密にしておこうとしているその構造を、全く無粋なことにこの物語の中から洗い出そうというのが本稿のねらいなのである。

この秘密を、エンデ自身が思わず知らず、あるいはやむを得ず暴露してしまっ

た命題が物語『モモ』の中に一箇所だけ出てくる。それは、初めて〈どこにもない館〉を訪れたモモに対して、マイスター・ホラが語って聞かせた次の言葉である。

モモは大広間の中をキョロキョロ見まわして、それから尋ねました。「あなたは時計を実にたあくさん持っているんですねぇ。人ひとりひとりに、各々ひとつずつあるんでしょう、そうよね。」

「そうじゃないんだよ、モモ。」と、マイスター・ホラは答えました。「これらの時計は、私が道楽で集めたものにすぎないんだよ。これらは、各々の人が胸の内に持っているもののきわめて不完全な模造品にすぎないのだよ。」

(Sie sind nur höchst unvollkommene Nachbildungen von etwas, das jeder Mensch in seiner Brust hat.[2])

これを味もそっけもなく、簡潔明解に本稿の筆者の言葉で言えば、「物は心の不完全な似姿である。」ということになる。これが、物語『モモ』全体を貫いている基本的理念なのである。とはいえ、現実の世界はそんなに単純ではない。我々の住んでいる世界では、「物」がいろいろな姿・形・種類をとって存在していることに疑念を懐く者は誰も居ない。しかし、わかりづらいのは「心」である。「心」もいろいろな姿・形・種類となって存在する。更にわかりづらいのは「霊」である。「心」の存在を疑う者はないとしても、「霊」となると、その存在さえも信じない人も多かろう。しかもこの「霊」がまたいろいろな位階で、各々の位階の霊がいろいろな種類をとって存在していると、エンデは言っている。霊の世界は、我々の大多数の者にとっては、神秘の世界であり、正に不思議な世界なのである。物語『モモ』の中に不思議な人や所が多々登場するのは、この物語が展開されている場が霊界にまで及んでいるからであろう。ミヒャエル・エンデは、画家であった彼の父エドガー・エンデの「死にゆく精霊たち」という題の絵にふれて、次のように言っている。

言ってみれば、精霊が死に込むことによって、そもそも物質が成立する。物質世界の創造行為はそのことにほかなりません。…ここでまたもや私たちの五感で知覚する世界の背後に、ほんとうにさまざまな叡知存在たちがいる、という見方につながっていくわけです。…天使、大天使、知天使、熾天使、その他さまざまな位階で名づけられる存在たちが居ますけれども、それらの存在は最終的には、物理的に見える世界と織りあわさって、巨大な一体性をなしているのです。[3]

これは、とりもなおさずミヒャエル・エンデ自身の芸術観でもあり、彼自身の世界観でもある。このことを彼は次のように明言している。

子安　エンデさんの芸術観の中にはいりこんできたところで、もうひとつ、私の気になる言葉を『オリーブの森で語りあう』から取り出します。人間は、「人間だけの力で何もかもやってのけようと思う必要はない。世界には、他のいろいろな力が存在していて、それらが助けにはいったり、しかるべき条件をととのえてくれたりする」という、その「ほかの力」のことです。ドイツ語で「力」を意味する名詞をふた通り（Kräfte と Mächte）使い、それも複数形になっている。これ程はっきり確信なさる「力」とは何のことですか。

エンデ　それを聞かれれば答えなければなりません。この言葉は、私の全世界観、全人間観の表明なのです。宇宙のひろがりのなかには、人間以外の存在(andere Wesen)が、じつにおびただしい数でいるということ――昔はそれらの存在を神と呼ぶこともあった。あるいは天使とか。いや、どう名づけるかは、たいして重要ではない。とにかく人間より高いところに、さまざまな位階をもった叡知存在たちがいます。それらの手が、私たち人間のすることに、ともに力をかしてくれている。彼らは、世界のための共同作業者たちです。

子安　エンデさんの本には、いつも必ず、いわばこの世ならぬ所からの助けの手が主人公におりてくる場面が多いのですけれど、そう、ちょっと例をあげるだけでも『モモ』のマイスター・ホラ、そこへ道案内をするカメのカシオペイア、…。で、それらの人間外登場物は、エンデさんにとっては、一種の比喩の材料というわけではないのですか。本当に高次存在として私たちに送ってくる力がある、ということの芸術的表現なのですか。

エンデ　はい、もちろんです。私たちの全世界は、いつも「橋のむこうの世界」から送られてくる力があってはじめて成り立っています。それでもひとびとは、そのもうひとつの世界などありえない、と思っているのです。(4)

以上のことを総合して要約すれば、重要なことは次の三点である。

一　世界は、叡知存在、人間および物質の三者から構成されている。叡知存在は客観的に実在しているものであって、けっして単なる芸術的比喩ではない。

二　世界を構成している叡知存在、人間および物質は、互いに有機的に関連しあって存在しているのであって、けっして無関係にばらばらに存在している

のではない。世界は、これら三者の有機的結合体である。

三　叡知的存在は最も完全な存在であり、人間はそれの不完全な似姿・模造である。物は、例えば時計は、人間の心の中にあるものの不完全な模造品である。つまり、物質は人間の心の中にあるものの不完全な模造品である。

以上のようなミヒャエル・エンデの世界観が、ルドルフ・シュタイナーの世界観とよく似ていることは、既によく言われてきたことである。エンデは、自分とシュタイナーとの関係について次のように述べている。

> **エンデ**　私の世界観と私の作品、という関連でもう少し話を続けるならば――たしかに私は30年以上もシュタイナーを読んでいます。けれども私はいつも、自分で正しいと感じたこと、自分の良心にしたがってこうあらねばならぬと思ったことをおこなってきました。ほかの人から指示されて行動することはありませんでした。私は自分の内なる羅針盤にしかしたがいません。…だからシュタイナーから学んだことも、私はすべて私自身のやり方に変容してしまうように努めてきたのです。…
>
> **子安**　ここで私が、「そしてアントロポゾフィーは、ミヒャエル・エンデの構成要素になりきった」というとしたら？
>
> **エンデ**　私は、そうでありたい、と願っています。(5)

このようにして形成されたエンデの世界観および芸術観は、当然のことながら彼の作品『モモ』の中に反映されているはずである。この点を、『モモ』の中心的登場人物であるモモ、およびその他の登場人物、この物語の主題である時間、およびこの物語が展開される場・空間について考察することにする。

物語『モモ』には、エンデ自身が描いた1枚の口絵がそえられている。その口絵の最前景には、画面の底辺中央部からやや右へ傾きながら松の木の幹が1本、大きく描かれている。この松の木の枝葉は画面の上方約4分の1程の空間を占めているだけだから、この松は画面の中心部分を見通すには何のさしさわりはない。この松の木の幹のすぐ背後には、画面の中央左右いっぱいに、崩れ落ちている部分が所々にある比較的小規模な古代屋外円形劇場の廃墟が描かれている。この絵を見る人の視線は、まず最初はこのすり鉢状の劇場の中心部にある舞台にくぎづけになるであろう。この舞台を円形に囲みながら階段状の観客席がほぼ同心円状にゆるやかにせりあがってゆき、やがて最上段のへりに到達する。中央の舞台にも、階段状の観客席にも、所々に雑草がはえている。もはや役者も観客も1人もいない。この円形劇場のむこうには、この廃墟を包むかの

ように中央から左の方へ並んで、5、6本の松の木がはえている。柄の長いこうもりがさの柄のような、途中に枝がない細くて長い幹、その上端に開いた雨がさのように枝葉が茂っているあの独特の姿をしているローマの松である。これらの松の樹冠も、上の方へのびて行って、画面のいちばん上の部分で、最前景に描かれている松の木の樹冠と重なっている。従ってこれらの松の木も、円形劇場のむこうを見わたすのにはほとんどさしさわりはない。円形劇場の廃墟のむこうには見通しのいい田園風景が広々とひろがっている。松の木の枝葉の下の方、ころあいの程よいあたりに、地平線が画面の左右いっぱいに横切っている。その見通しのいい広々とした大地には、四隅の鉄柱をたすきがけ状のけたで組みあげた高圧電流配送用の電柱が列をなして描かれている。一番近くにあるのは、この円形劇場のすぐ向こうを、この円形劇場をとり囲むようにして並んでいる。よく見るとそのむこうにも列をなし、更にそのむこうにも列をなし、地平線のかなたに到るまで幾重にも列をなし、この円形劇場の廃墟におしよせてくる大軍のように、高圧電流用の鉄骨の電柱が目だたないように描かれている。実は、この古代円形劇場の廃墟は、モモの芸術的表現であり、これらの高圧電流配送用の鉄骨の電柱は灰色の男たちの芸術的表現なのである。更に、モモは質的価値の芸術的表現であり、灰色の男たちは量的価値観の芸術的表現である。『モモ』は「時間」をめぐって、この両者の抗争を物語った作品なのである。(6)

さて、話を口絵のことから、いよいよ物語へ進めよう。ある日、10歳くらいとおぼしい浮浪児の少女が忽然と現れ、この円形劇場の舞台の下の穴蔵のような荒れ部屋の中に、壊れた外壁のすき間からもぐり込んで、住みついたというのである。この噂を聞きつけた近隣のおじさんやおばさん達が、この浮浪児の身を案じて、この廃墟へ出かけて行って、身の上を尋ねる。

「おまえはモモという名前だって、言ったね。」

「うん。」

「かわいらしい名前だ。でもそんな名前は聞いたことがなかった。で、誰がその名前をつけてくれたのかい。」

「あたしよ。」と、モモは言った。

「自分でそう名前をつけたんだ？」

「うん。」

「それで、いつ生まれたんだい。」

モモは考え込んでいましたが、やっと言いました。「あたしはもうずうっとここに居たわ。思い出せるのはそれだけよ。」

「そうしたらおまえには、おじさんとかおばさんとか、おじいちゃんとか、まあな、おまえが帰って行くことのできる家族はいないのかい。」
モモはその男の人の顔をただじいっと見つめているだけで、しばらくの間、口をききませんでした。それからやっと口ごもりながら言いました。「ここがあたしの家だもん。」
「そうか、そうか、」とその男の人は言いました。「でもおまえはまだ子供だ――としはいったい、いくつなんだい。」
「100。」と、モモはためらいながら答えました。
そこに居た人々はそれは冗談だと思ったので、皆どっと笑いました。
「いや本気の話、いくつなんだい。」
「102。」と、モモは答えました。でも、もっと自信がなさそうでした。

まあ、ざっとこんな様子だったのである。要するに、モモ自身の記憶の中には、両親を含め家族というものがない。自分がどこからやって来たのかわからない。というより記憶のある限りでは、ずうっとここに、つまりこの崩れかけた円形劇場の舞台の下の崩れかけた部屋に住んでいた、というのである。そして年齢は100歳か、102歳だというのである。つまり、モモの言葉によれば、モモの出自には、我々普通の人間にはつきものの時間規定も場所規定もあてはまらないのである。モモはいきなり、外見は10歳前後の少女として、古代の屋外円形劇場の廃墟に、忽然と出現したのである。しかし普通読者は、モモのこれらの言葉に深い意味のあるものとは受け止めず、次のように考えながらおもしろおかしく軽く受けながすであろう。当然この子だって、何年何月何日に、何市か何村かの何通りの何番地で、何の誰謀という名前の親から生まれたのにきまっているのに、この子はそんなことまで全然知らないかわいそうな身なし子なんだ、と。

真実はモモの言葉にあるのだろうか。それとも、普通の読者の想像にあるのだろうか。

この疑問に答える直接の答は、『モモ』の中にはない。しかし、エンデは、子安美知子著『エンデと語る』（朝日新聞社）の中で次のように語っている。

エンデ　しかし、どんなに奇異で謎めいて聞こえようとも、事実はあります。時間・空間の内部にあるこの世界、そこに時空に支配されない何かが、たえず突き入ってきているという事実――絶対にあり得ないはずなのに、しかしたしかに生じています。見たくなければ、見えませんよ。世の中に厳然として起こる事実のなかには、それをほんとうに見るためには自

分の意志を働かせなければならない。見ようという気にならなければ見えない事実というのが、実際ありますから。(73ページ)

とすれば、モモの言葉には一言の嘘もない。エンデの世界の中では、モモは本来は時空に支配されていない何かであった。それが時間・空間の内部にあるこの人間世界へ「突き入ってきた」存在なのである。それ故、モモは真実彼女自身が語る通りの存在の子なのである。この真実を見ることのできない者にとっては、モモは不思議な子、奇妙な子なのである。しかし、この真実を見ることのできる者にとっても、モモはやはり真実不思議な子なのである。

これで、信じようと信じまいと、忽然と廃墟に出現したモモの素姓は少しは明らかになってきた。

それでは次の問題へ話を進めよう。エンデの言う通り、モモは時・空に支配されない世界から、時・空に支配される世界に、つまりこの人間界にある円形劇場の廃墟に「突き入ってきた」のだとすれば、それ以前にはモモは、いつどこで、どんなふうにして、実在していたのだろうか。これについてはエンデは、正にこの物語『モモ』の第1部第5章「多くの人々のための物語とモモ1人のための物語」の中で、詳細明解に語っている。物語の中の物語の形で、観光ガイドのジジがモモ1人のために語る「魔法の鏡の物語」という題の物語がこれである。それは、次のように語られている。

昔むかし、モモという名前の美しいお姫さまが居ました。モモ姫はいつもビロードと絹に身をつつみ、雪におおわれた山の頂の色とりどりの色ガラスの城に住んでいました。

モモ姫は、およそ望むことのできるものなら何でも持っていました。食べるものはおいしいおいしいものばかり、飲むものは甘い甘いぶどう酒だけでした。眠るのは絹のふとん、座るのは象牙の椅子でした。彼女は何でも持っていました —— しかし彼女はひとりぼっちだったのです。

召使も、侍女も、犬も、猫も、鳥も、そして花までも、モモ姫の身の回りのものは何もかもすべて、鏡にうつった像だけだったのです。

というのは、モモ姫は魔法の鏡を持っていたからです。その鏡は、大きくて、まるく、純銀でできていました。彼女はその鏡を、毎日毎晩、世界へ送り出すのです。そうするとその鏡は、陸をこえ海をこえ、都市をこえ野原をこえ、空をただよって進んで行くのです。それを見た人々はこの魔法の鏡を全然不思議に思わず、あれはお月様だよ、と言うだけでした。

ところで、この魔法の鏡は、帰ってくるといつも、旅の途中写し取った像

を全部、ぶるぶるっと体をゆすってお姫さまの前にバラバラッとふり落とすのです。その像の中には、道すがらありのまま写し取った美しいものもありますし、みにくいものもあります。おもしろいものもありますし、退屈なものもあります。お姫さまは気に入ったものだけを探し出して、他のものは小川に捨てました。…

ひとつ言い忘れていましたが、モモ姫は不死だったのです。彼女はいまだかつて１度もこの魔法の鏡に自分の姿をうつして見たことがなかったからです。というのは、この魔法の鏡に自分の姿を写して見た者は、それによって死すべき者となるからです。そのことをモモ姫はよく知っていました。だから彼女はけっしてそうしたことはなかったのです。

こうして彼女は魔法の鏡が集めてきたありとあらゆる像と一緒に暮らし、一緒に遊び、それで十分満足でした。

ところが或る日、この魔法の鏡が彼女にひとつの像を持ってきたのです。その像は彼女にとっては他のすべてのなによりも、もっと重大なものだったのです。それはある若い王子さまの像でした。彼女がそれを見たとき、彼への憧れはつのるばかりで、どうしても彼のところへ行きたいと思うようになったのです。しかしいったい、彼女は何から始めたらいいというのでしょう、彼がどこに住んでいるのか、彼が誰なのか、はいうにおよばず、彼の名前さえ知らなかったのです。

他によい考えが思いあたらなかったので、彼女はやむを得ず魔法の鏡をのぞき込む決心をしました。というのは、この鏡が自分の像をあの王子さまのところへはこんで行ってくれるだろう、この鏡が空にさしかかった時、ひょっとしたら彼は偶然に上を見あげて、自分の像を見てくれるかもしれない、そして空をただようこの鏡のあとを追ってきて、ここに居る私を見つけてくれるかもしれない、と考えたからです。

そこで彼女は長い間じいっと鏡の中をのぞき込み、彼女の像を写した鏡を下界へ送り出したのです。しかしこうして彼女はそのため死すべき者となったのです。…

モモ姫は待ちに待ちました。しかし、王子さまは来ませんでした。そこで彼女は、自分で下界へ出かけて行って、彼を探そうと決心しました。

彼女は、彼女の身のまわりにいた像すべてにひまを出しました。それからたったひとりで、やわらかい上靴をはいただけで、色とりどりの色ガラスの城を出て、雪におおわれた山々を越えて、下界へと降りて行ったのです。

彼女は、世界中のありとあらゆる国をさまよい歩いたあげく、ついに今日の国にやってきました。その時には上靴はすっかり破れていて、はだしで歩かなければなりませんでした。しかし、彼女の姿を写した魔法の鏡は依然としてこの下界の上空をただよい続けていたのです。…そうこうしているうちに、モモ姫のビロードの着物も絹の着物もすっかりボロボロになっていました。今や彼女は古いダブダブの男ものの上着を着、つぎはぎだらけのスカートをはいていました。そして古い廃墟に住んでいたのです。(7)

この話は、ひとつには、あまりにも並はずれの空想家であるため、時には人々から嘘つきと非難されることさえあった観光ガイドのジジの作り話として語られているために、もうひとつには、モモがはじめて円形劇場の廃墟に現れた時の様子を語っている箇所から40ページも後になって語られていて、この間いろいろな出来事が語られているため、この魔法の鏡の物語の中のモモ姫と円形劇場の廃墟に現れた浮浪児のようなモモとの関係に気づく読者は多くないかも知れない。そして、それをこと更に詮索する読者はそう多くはないであろう。しかし、エンデの世界観にてらして考えれば、この2人のモモの関係は、見落とされてはいけないし、見あやまられてもいけないのである。それ故、敢えて魔法の鏡の物語の要点を整理し、その関係を解明することにしよう。

一　まず始めに、超人間世界の天上界に、時・空の規定を持たない叡知存在であるモモ姫が存在していた。モモ姫は不死であった、つまり永遠の生命を持っていた。

二　叡知存在であるモモ姫の叡知は、自他ともにありのままに写す「魔法の鏡」であった。

三　ある日モモ姫は、その鏡が写して持ってきたひとりの見ず知らずの王子さまの像を見て、その王子さまにおさえきれない「憧」を懐いてしまった。そこでモモ姫はその王子さまを呼び寄せるため、自分の不死を捨てて自分の姿をその鏡に写し、その鏡を下界へ送り出した。

四　しかし、いくら待ってもその王子さまはモモ姫に気づいてくれなかった。当然、来てもくれなかった。そこでモモ姫は自らその王子さまを探し出すため、憧れを胸にひめて天上界から下界の「今日の国」へ降りてきたのである。そしてありとあらゆる国々を放浪したあげく、ローマ郊外の古代円形劇場の廃墟にたどりついた。ということである。

要するに、モモは時・空に規定されない叡知存在が、時・空に規定されている人間界に「突き入ってきた」存在なのである。それ故、廃墟に住みついた死

すべき人間であるモモは、叡知存在である不死のモモ姫の不完全な似姿・模造である。ということになる。これでモモの素性は明らかになった。

モモの前身談はこれくらいにしておこう。話を円形劇場の廃墟に住みついてから以後のモモに進めよう。近隣の人々の心配をよそに、モモはさっそく「聞く」という一種の超能力を発揮して、近隣の人々と理想的な社会を形成して行く。

この小さなモモが彼らのところに居る期間が長びくにつれて、彼らにとって、モモはますますなくてはならない存在になって行き、もしモモがある日突然ここから居なくなってしまったらどうしよう、と心配する程でした。そういうわけで、モモの所にはいつもとってもたくさんの人々が訪ねてくるようになりました。モモのそばにはいつもだれかが話しこんでいる姿が見えました。モモを必要としているのにモモの所に来ることのできない人は、人をやってモモをむかえに来ました。モモを必要としているのにそのことに気づいていない人が居れば、まわりの人々はその人に、「ぜひモモの所へ行ってごらん！」と教えてあげました。

この言葉は、次第に近隣の人々のきまり文句となって行きました。そういうわけで、「ごきげんよう！」とか、「ごちそうさま！」とか、「おやまあ、たいへん！」と言うのと全く同様に、何か事がある度ごとに、「ぜひモモのところへ行ってごらん！」と言うようになりました。(8)

このようにモモの所にやってきた人々に対してモモがやってあげることができたことは、たったひとつ、全身全霊をかたむけて彼らの言葉に耳をかたむけてやることだけだった。ところがモモのこの能力は、不思議な能力だったのである。どうして不思議かというと、モモに話を聞いてもらっていると、

(一)　ばかな人にも急にまともな考えが浮かんで来るし、

(二)　自分のどこにそんな考えがひそんでいたのか全然わからないような考えが急に浮かびあがってくるし、

(三)　途方にくれてどうしていいかわからなかった人は、急に自分がやろうとしていることがはっきりしてくるし、

(四)　ひっこみ思案の人は、急に心の中に勇気が湧いてくるように感じるし、

(五)　不幸な人やしょげかえっている人は、自己の存在意義に対する信念や、自分の仕事の重要性に対する信念が湧いてきて、たのしい気分になるのである。(9)

(一) にあてはまるのは、左官屋のニコラと安居酒屋の亭主ニノである。彼

らはモモに話を聞いてもらうことによって、互いに相手を「愛する」能力を身につけたのである。

（二）と（四）にあてはまるのは、子供たちである。彼らはモモと一緒に居るだけで、奇想天外な遊びを思いつき、ひっこみ思案な子でも、その遊びに熱中し、見ちがえるほど勇敢に行動したのである。子供たちはモモと一緒に居るだけで、「空想する」能力や熱中する能力を身につけたのである。

（二）と（三）にあてはまるのは、観光ガイドのジジである。彼もモモと一緒に居るだけで、彼の空想力は天衣無縫にはばたき始め、自分のやりたいことがはっきりしてきて、あすへ向かって「希望する」能力が生まれてきたのである。

（五）にあてはまるのは、道路掃除夫のベッポじいさんである。彼もモモに話を聞いてもらうことにより、道路掃除という仕事の重要さへの信念をますます深め、道路掃除夫であっても自分はこの世では唯一無二の重要な存在であるという信念をますます深め、ますます喜々として自分の仕事に着実に励むようになったのである。つまりベッポは、モモに話を聞いてもらうことによって、「信じる」能力をますます強固たらしめたのである。

つまりモモは、「聞く」という方便によって人々に、「愛する」、「空想する」、「希望する」、「信ずる」という超自然的な徳[10]を与えたのである。もともと持っていないものは与えることはできない。では、人々にこれらの徳を与えたモモは、本来どういう徳を持っていたのであろうか。その答は、本稿142ページの第四項の中にある。モモ姫は、「憧」を胸に秘めて天上界から下界へ、叡知界から人間界へ、降りてきたのである。それ故、モモが叡知界からこの世へ持ってきた叡知的徳は、「憧」だったのである。とすれば、モモが持っている「憧れる」という叡知的徳は、人間界ではモモの「聞く」という方便によって、巷の人々の四つの超自然的徳に分化し、開花したことになる。

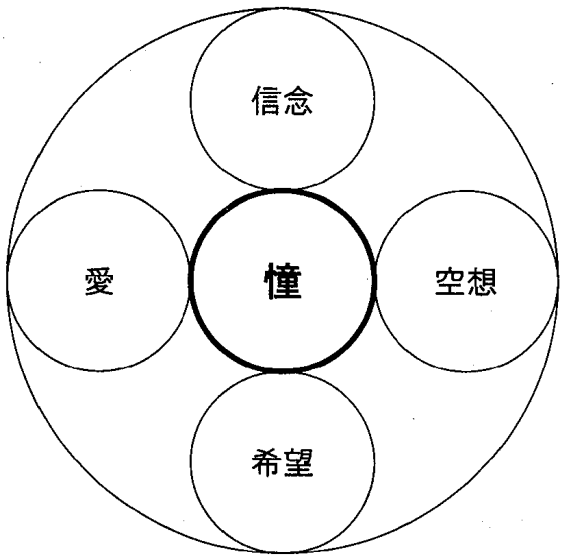
モモの徳、「憧れる」 → ニコラとニノの徳、「愛する」
→ 子供たちの徳、「空想する」
→ ジジの徳、「希望する」
→ ベッポの徳、「信ずる」

これをエンデの世界観で表現すれば次のようになる。

ニコラとニノは
子供たちは
観光ガイドのジジは
道路掃除夫のベッポは
→ モモの不完全な似姿・模造である

愛は
空想は
希望は
信念は
憧れの不完全な似姿・模造である。

これらの概念と概念との関係は、下記の図で表すこともできるであろう。



次に、モモの「聞く」行為を考察することにしよう。「愛する」、「空想する」、「希望する」および「信ずる」という四つの徳は、生命＝生活＝人間の時間――エンデは『モモ』において、正にこの生活としての時間を問題とした[11]――が健全であるためには本来備えていなければならない能力＝徳なのである。これらが失われると、生命＝生活は病的になり、全部失われてしまえばその人の生命＝生活は心理的には死の状態になる。モモは「聞く」という方便を駆使することによって、ニコラやニノその他の市井の人々の生活をより健康な状態に導いてやったのである。モモは「聞く」という医術によって市井の人々の心の病を癒し、彼らの心の健康を増進したのである。それ故に、何か困ったことが起きると、「モモのところへ行ってごらん！」という言葉がきまり文句になった程、市井の人々はモモを必要としたのである。モモが駆使した心の医術ともいうべき「聞く」行為・能力は、モモより存在の位階が１段下位のニコラやニノその他の市井の人々から見れば、確かに不思議な能力であった。これについては、エンデ自身が次のように説明している。

86年の夏、来日中のミヒャエル・エンデ氏を私たちの日本シュタイナーハウスにお迎えしたとき、かねてからモモの「聞く力」に深くとらえられ

ていた友人たちのひとりが、

「エンデさん、あの秘密は何でしょう。不思議な力ですね。」

とたずねました。エンデ氏は、かみしめるような口調でこう答えました。

「モモが身につけていたような、人の話に聞き入る力、その秘密は、自分をまったくからにすることにあります。それによって、自身の中に他者を迎える空間ができます。そしてその相手をこの空間に入れてあげます。モモは、そうやって彼女の中にはいってくるものが、良いものか悪いものかを問うことをしません。」(12)

モモが人の話に聞き入る行為は、からにした自分の心の中に、その人をありのまま、受け入れる行為だったのである。モモは人に対してだけこの「聞く」という行為を行っていただけではない。モモは、心棒づよく、歌を忘れたカナリアに1週間も耳を傾け、ようやく歌を思い出させることもあった。

モモは、犬や猫にも、コオロギやヒキガエルにも、そればかりか雨や樹々の枝にざわめく風にさえも耳を傾けました。

晩、友だちが皆家に帰って行ってしまうと、モモはひとりで長い間、この古い劇場の大きな石の縁に腰をおろして、星のまたたく満天に耳を傾け、ただただじいーっと偉大な静かさに聞き入るのです。

こうしていると、モモはまるで、星の世界に聞き耳を立てている大きな耳の真ん中に座っているような気分になるのです。そうすると、妙に心にしみ入る静かな、しかしすごく力強い音楽が聞こえてくるように思えてくるのです。

こういう夜には、モモはかならずとても美しい夢を見ました。(13)

つまりモモは、大宇宙の音楽を聴くことのできる霊聴能力の持ち主だった。モモが住みついた円形劇場の廃虚は、モモの霊耳の芸術的表現だったのである。

ここで、本稿で既に140ページから142ページに引用した「魔法の鏡の物語」を思い出すことにしよう。天上界の叡知存在モモ姫は、純銀でできている大きなまるい魔法の鏡を持っていた。モモ姫はその鏡を毎日毎晩、世界へ送り出していたのである。そうするとその魔法の鏡は、陸を越え、海を越え、都市を越え、野原を越え、空をただよって進んで行く、そしてその途中写し取った像をすべて、美しいものもみにくいものもすべて、ありのまま、モモ姫のところに運んでくるのである。すなわち、魔法の鏡は叡知存在モモの認識能力そのものであり、その鏡を世界へ送り出して写してきた像を見るということは、モモ姫の外界認識行為だったのである。廃墟に住みついたモモは人の話を「聞く」と

きは、心をからにするという。この時のモモの心は、モモ姫の魔法の鏡と実によく似ているのである。それ故、次のように結論することができよう。

廃墟のモモの心は、天上界のモモ姫の魔法の鏡の不完全な似姿・模造である。

廃虚のモモが聞く行為は、叡知存在モモ姫が魔法の鏡を世界へ送り出し、それが写し取ってくる像を見る行為の不完全な似姿・模造である。

なお、心を鏡に喩えることは、Ihr Herz war wie ein blinder Spiegel.（彼女の心はくもった鏡同然であった。→彼女は明確なことは何も思い出せなかった。）というドイツ語のありふれた言いまわしからもわかるように、ごく自然なことなのである。

このように不思議な能力を有しているモモによって、『モモ』の口絵に描かれているあの古代屋外円形劇場の廃墟のまわりの巷には、愛、空想、希望、信念の超自然的徳に満たされたモモの理想的社会が形成され、隆盛をきわめたのである。『モモ』の第2部「灰色の男たち」では、健全な生命活動が隆盛をきわめているモモの理想的社会の中へ灰色の男たちが、さながら目に見えない侵略軍のように入り込んできて、モモの社会の人々を征服して行く。ついには、モモ1人を残して全員、灰色の男たちに征服されてしまう。ここに到って、モモと灰色の男たちは、時間をめぐって生死をかけて戦うことになる。『モモ』の副題が「時間泥棒と盗まれた時間を人間にとり返してくれた子供についての不思議な物語」とあるのは、このことをさしているのである。ただし、次のことは理解しておかなければならない。灰色の男たちが時間を盗むとか、その盗まれた時間をモモが取り返すとかいうことは、灰色の男たちが例えばお金を盗むとか、その盗まれたお金をモモが取り返すとかいうこととは具合がちがう。時間は盗まれたり取り返されたりしても、その時間はあっちへ行ったりこっちへ来たりするわけではないのだ。時間が灰色の男たちに盗まれるということは、時間が灰色に変わるということである。灰色の男たちの性質を帯びた時間、すなわち灰色の男たちの価値観を帯びた時間に変わる、ということなのである。同様に、灰色の男たちに盗まれた時間をモモが取り返すということは、灰色の時間がモモ色に変わるということ、すなわち灰色の男たちの価値観を帯びた時間がモモの価値観を帯びた時間に変わる、ということなのである。

ところで、物語『モモ』でエンデが問題とした時間とはどういう種類の時間であろうか。エンデは言う。»Zeit ist Leben.«[14]これは「時間は生きることである。」という意味にも、「時間は生活である。」という意味にも、「時間は生命である。」という意味にも解釈できる。おそらくは、この三つの訳を総合した意味

に解釈するのがいちばん正しいであろう。»Zeit ist Leben.« は、この言葉が使われている状況次第で、この三つの訳のいずれにもなりうるのである。いずれにせよエンデは、時間を問題とすることによって、生き方を問題としたのだ。そして、エンデが擁護する時間＝生き方は、明らかに「モモの時間」＝「モモの生き方」なのである。

モモ色の社会の中で、生きるということは

ニコラやニノの場合は、「愛する」ことである。

子供たちの場合は、生きることは「空想する」ことである。

ジジの場合は、生きることは「希望する」ことである。

ベッポの場合は、生きることは「信念を持つ」ことである。

こういう時間観を持っているモモ色の社会の中へ「音もなく、人目にもつかず、日一日と深くくい込んでくる侵略軍のように」(15) 灰色の男たちは侵入してきたのである。灰色の男たちは時間貯蓄銀行の外交員として登場し、モモ色の人々に、時間を節約してその節約した時間を彼らの時間貯蓄銀行に預けるよう、巧みに勧誘して歩き回るのである。

では、灰色の男たちが実践しようとしている時間とは、すなわち生き方とはどういうものであったのか。それは、灰色の男すなわち時間貯蓄銀行の外交員BLW／553／cが、むきになってモモに対して主張したことにつきる。

> 「人生で大切なことは、たった一つしかない。それは何かに成功すること、ひとかどのものになること、資産を持つことだ。ほかの人より成功し、ほかの人よりえらくなり、ほかの人よりお金持ちになった人には、そのほかのものは何でもひとりでにころがりこんでくるものだ。友情だって、愛だって、名誉だって、そのほか何だってそういうものなんだ。…」(16)

つまり、灰色の男たちの場合、生きるということは、成功し・ひとかどのものになり・資産（お金）を持つことである。時間は金（かね）なり、である。結局は、モモ１人を除いてほかの人々はすべて灰色の男たちの言うなりになったのである。つまり灰色の男たちに侵略され、征服されたのである。

ここで、灰色の男たちの言う通りに時間を節約する、ということは具体的にはどうすることなのかを見ておかなければならない。

巷の人々の典型とも言うべき床屋のフージー氏は、灰色の男たちが経営する時間貯蓄銀行の外交員ナンバーXYQ／384／bの口ぐるまに乗せられて、さっそくその日から毎日１日２時間ずつ時間を節約して、その節約した時間をこれから先20年間彼らの時間貯蓄銀行に預け続ける契約をしたのである。しかし、

フージー氏は具体的にどうしたらいいかわからない。

「やりますとも！」とフージー氏は声を大にして言いました。「どうしたらいいんですか？」

「おやおや、お客さま！」と、その外交員はまゆをつりあげて言いました。「時間の節約のしかたくらいご存知でしょう。例えばですよ、もっとさっさと仕事をし、余計なことは一切はぶかなければいけません。…」(17)

要するに、仕事の能率化・合理化である。「余計なこと」というのは、当然のことながらその灰色の男たちの考えでの「余計なこと」である。では、灰色の男たちの言う「余計なこと」とは何であろうか。

これに答えるためには、灰色の男たちに説得され、まるめこまれた人々は彼らの言いなりになってどんな生き方をするようになったか、あるいは、背後で糸を引いている灰色の男たちの策略にかかった人々は、どんな生活をしなければならない状態に追い込まれたか、を見なければならない。

床屋さんのフージー氏は、灰色の男の言うままに、客と楽しくおしゃべりするのをやめ、年老いている母親を老人ホームに入れて母親の世話をする時間をはぶき、身体の不自由なダリア嬢と一緒に過ごす時間を1日30分から2週間に一度に減らし、セキセイインコを飼うのをやめ、親しい友人とつき合うのもやめ、合唱クラブに顔を出すこともやめてしまったのである。こういうことはすべて、灰色の男たちの考えでは「余計なこと」なのである。自分の親をであれ、他人をであれ、動物をであれ、およそ他者を「愛する」ことは、よけいなことだと言うのである。こうしてフージー氏の仕事の中からも、個人生活の中からも、「愛する」ことも、あるいは「愛される」ことも完全になくなってしまったのである。そして、お客1人に1時間もかけることはやめて、15分でかたずけるようになったのである。おそらくはこれによって売上げは以前の3倍にも4倍にもなったことであろう。すなわち、おそらくはフージー氏は、灰色の男の言う人生で大切なたったひとつのこと、すなわち「成功すること・ひとかどのものになること・資産を持つこと」を実現したのである。

ところで、モモにとっては、時間とは生きることであり、生きることはひとつには愛することであった。それ故、生きることから愛することを消し去ればその人には何も残らなくなる。このことを次のように語っている。

「…とにかく彼はすっかり人が変わりはてていてねぇ、とっても神経質で、とっても無口で、とっても無愛想になっていたよ。…彼はもはや、彼自身の幽霊にすぎない。もはやあのフージーなんかではない。」(18)

これが、灰色の男たちの「時間を節約する」ことの実態だったのである。灰色の男たちの言うなりになったフージー氏を灰色のフージー氏と呼ぶことにすれば、灰色のフージー氏はそれ以前のフージー氏が「死に込む」ことによって出現したのである。こういうことがすべての人々に起こったのである。

ニノは、もうからない居酒屋のしがない亭主で一生を終わるのはごめんだと言って、仲のいい人々のたまり場となっていた彼の古い小さな居心地のいい居酒屋をたたんで、〈スピード料理店・ニノ〉を新築開店し、大当たりする。これは、灰色の男たちに操られた結果である。今や彼は、途絶えることなく次から次へとやってくる客から代金をもらい、つり銭を渡すのに余念がなく、助けを必要として彼のところに訪ねてきたモモとまともに話をする気もなければひまもない。彼も、ひたすらお金をかせぐロボット・生ける屍と化したのである。灰色の男に支配されたニノを、灰色のニノと呼ぶことにすれば、灰色のニノは、「愛すること」即ち「生きること」をやめてしまった結果出現した存在なのである。これをエンデの言い方で言えば、灰色のニノは、モモ色のニノが「死に込む」ことにより出現したのである。それ故、灰色のニノはモモ色のニノの不完全な似姿・模造なのである。これと同様のことは、子供たちについても、観光ガイドのジジについても、道路掃除夫のベッポについても言えるのである。

観光ガイドのジジを手中におさめることは、灰色の男たちにとってはいとも容易なことだった。まず、新聞に「最後の真の語り部」という広告記事を出し、ジジを大々的に売り出したのである。人々はジジの所に押し寄せてきた。そして人々は、ジジの空想力に裏打ちされた真のすばらしいお話に魅了され、彼をほめそやした。こうしてジジは、たちまちのうちに当代最大の人気スターの座におしあげられ、名声と富を手にしたのである。そして、将来は有名人になり、大金持ちになり、広い庭で囲まれた大邸宅に住み、絹のふとんにくるまれて眠り、金や銀の食器で豪華な食事をしたいという、ついこの前まで、赤貧にあえぎながらあすに向かって懐いていた夢のような彼の希望は、完全にかなえられたのである。今や彼には、あすに向かって希望することは何ひとつなくなってしまったのである。このようにして「希望する」ことを灰色の男たちによって奪い取られたジジは、今や生きる希望を失い、虚無感に苦しむ瀕死の重病人であった。そのうえ、かたわらにモモが居なくなってからは、たちまち彼の空想力は涸渇してしまい、新しい話はなにひとつも作れなくなった。そこで彼は、古い話をむし返し、他人のネタに尾ひれをつけて嘘話を語りつづけた。それでもなお、彼は、「おどろく程多産」な語り部として世間からもてはやされ続けて

いたのである。それは、背後で灰色の男たちが世間の人々を操っていたからである。そして彼は、名をジジからジロラモに改めた。空想力を失ったジロラモは、自分が嘘を語る語り部であることは、誰よりも自分がよくわかっていた。そして自ら、うそつきジロラモであることに、人知れず痛く苦しんだ。

あすに向かって「希望する」ことのみを生き甲斐としてきたジジにとっては、希望することを失ったジロラモは、生活＝生きることを失ったジジと同じである。それ故、灰色のジジ（ジロラモ）は、モモ色のジジが「死に込む」ことによって出現したのである。それ故、灰色のジジ（ジロラモ）は、モモ色のジジの不完全な似姿・模造である。

灰色の男たちが道路掃除夫ベッポを攻略するためには、ジジの場合より手をやいた。ベッポは、他の誰よりも堅固にモモを愛していたし、彼の仕事に関しては、一生をかけて築きあげた固い信念を持っていたからである。モモが廃墟から姿を消した時、ベッポはモモが灰色の男たちに捕らえられて連れさられたものと、勘違いしてしまったのである。それで彼はモモを救い出すために、執拗に警察に探索を願い出たのである。しかし、彼は気狂い扱いされて、ついに精神病院に入れられてしまった。いろいろな検査をされるだけで、全然理解してもらえないまま、いつまでたっても精神病院から出してもらえなかった。灰色の男たちは、モモは灰色の男たちに捕えられているのだと思い込んでいるベッポの勘違いと、いつまでたっても精神病院から出してもらえないベッポのこの窮状につけ込んだ。ある日の真夜中、1人の灰色の男が病室のベッポの枕元に立って、次のように言った。

「おまえが次の条件をのめば、我々はおまえにあの子を返してやる。その条件とはこうだ。おまえはこんりんざい、我々についても我々の活動についても誰にももらさないということだ。それからもうひとつ、我々はおまえに、いわば身代金として、10万時間の時間の節約を要求する。（中略）これだけのことを承知するなら、2、3日中にここから出られるよう取りはからってやろう。承知できないのなら、おまえは永久にここに居ればいいし、モモは永遠に我々の手もとに居ることになる。ようく考えてみろ。こんな気前のいい申し出は、今回1回限りだぞ。さあ、どうする？」

ベッポは二度なまつばを飲み込み、そしてかすれ声で言った。「承知した。」(19)

その数日後、彼はその精神病院から実際退院が許された。しかし、彼はその時は既にもう、彼が一生をかけて築き上げた仕事に関する信念を完全に捨てていた。病院を出るなり道路掃除の仕事を始めたけれども、今の彼の仕事ぶりは、

以前のように「喜びをもって、1歩進んでは1呼吸、そして1掃きしてはまた1呼吸」というやり方ではなかった。家に帰る時間をおしみ、朝早くから夜遅くまで、わき目もふらず、もの思いにふけることもなく、ただせかせかと、あたかもロボットのように掃き続けたのである。ベッポには、そうする以外に、モモを救い出すための身代金10万時間を節約する手だてが、思いあたらなかったのである。この10万時間は、なんと約11年5ヵ月の年月に相当するのだ！
自ら自分の信念を踏みにじったことを誰よりもよく知っているベッポは、ひどく心を病んだ。こうして、モモ色のベッポも灰色の男の手中に落ちたのである。「信ずる」ことを放棄したことは、ベッポにとっては、「生きる」ことを放棄したことと同じことである。灰色のベッポは、モモ色のベッポが死に込むことによって出現したのである。それ故、灰色のベッポは、モモ色のベッポの不完全な似姿・模造である。

空想することを天賦の才とする子供たちを攻略することは、灰色の男たちにとっては最も困難な仕事であった。いかに灰色の男たちといえども、子供たちを直接思い通りにすることはできなかった。そこで灰色の男たちは、子供たちの親たちや、市のお偉方を操ることによって、間接的に支配下に置いたのである。まず初めに大人たちが全員、灰色の男たちに支配されるに到り、その結果親たちには自分の子供の世話をするひまさえなくなった。親に面倒を見てもらえなくなった子供たちは、モモの居なくなった廃墟や、路上で、まともに遊ぶこともできずに一日中ウロウロ、ブラブラして時をすごすようになった。そこで灰色の男たちは巷の人々をあやつって、次のような世論をもりあげたのである。いわく、親に面倒を見てもらえない子供は不良化し、犯罪者になる。いわく、時間を遊びに浪費するがままに子供たちを放置しておくことは我々の文明にとっては恥辱であり、未来の人類に対する犯罪である、と。そこで市のお偉方は、市の各地区に《子供の家》を設け、廃墟や路上でブラブラしている子供たちを1人残らず強制的に《子供の家》に収容することとした。モモの友人たちも全員、強制的に《子供の家》に収容されてしまったのである。《子供の家》では、子供たちは将来有益な人材となるために、と称して、強制的にハイテク関連の教育を受けさせられた。遊びでさえも、将来のハイテク時代に役立つような遊びに限定され、しかも監督に監視されながら遊べるにすぎなかった。そんな遊びの中で、自分をMUX／763／Yと称する子供まで出現したのである。これは、灰色の男たちと同類の名称なのである。つまり、子供たちは今やついに一人前の灰色の男と化したのである。子供たちには、真に自主的・自発的な遊び

は許されなかった。それによって、子供たちからは真の空想力は奪い取られたのである。彼らの顔からは生命の輝きも、喜びも、天真爛漫な笑いも消えたのである。空想することを禁じられた子供たちは、生きることを禁じられた子供たちと同然であった。子供たちは、自由に遊ぶことを禁じられた結果、空想することを奪われ、死に込まざるを得ない状態に陥れられたのである。灰色の子供たちは、モモ色の子供たちが「死に込む」ことによって出現したのである。それ故、灰色の子供たちは、モモ色の子供たちの不完全な似姿・模造なのである。こうして、人間界は、モモ１人を除いて、完全に灰色の男たちの支配下におかれてしまったのである。

では、灰色の男とは何者であろうか。灰色の男たちの追跡をのがれて、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉にたどりついたモモに、マイスター・ホラは次のように語っている。

「あの人たちは、いったいどうしてあんなに灰色の顔をしているの？」と、モモはめがねでむこうを眺めながらたずねました。

「死んだもので命をつないでいるからだよ。」と、マイスター・ホラは答えました。

「おまえも知っているだろう。彼らは人間の生活時間を糧にして実存しているんだよ。しかし、その生活時間は本当の所有主から切りはなされると、文字通り死んでしまう。人間は一人ひとり自分の時間を持っているからね。だから、その時間は、本当の持ち主が本当に持っている間だけ生きているんだよ。」

「それなら、あの灰色の男たちは人間ではないんですね？」

「そうなんだ、彼らは人間の姿をしているだけなんだよ。」

「でも、それなら彼らは何なの？」

「実際は彼らは無なんだよ。」

「それで彼らはどこからやって来たの？」

「人間たちが彼らに発生する機会を与えるから、彼らは発生するんだ。彼らが発生するためには、それだけで十分なのだよ。…」(20)

『モモ』においては、時間とは生活することである。そして、モモにとっては、生活することとは「愛すること」、「希望すること」、「信ずること」および「空想すること」である。これらのいわゆる超自然的徳は、行動であって、それを行動しなくなればそれは死ぬ、つまり、「死んだもの」と化する。つまり、灰色の男たちは、四つの超自然的徳の死を糧として発生してくるのである。こ

うして灰色の男たちは発生する(entstehen)。そして実存する(da sein ＜ Dasein)。しかし実際にはけっして存在はしない (nichts sein)。つまりエンデは、モモによってもたらされた四つの超自然的徳の死滅現象＝喪失現象を灰色の男たちの発生現象として物語り、四つの超自然的徳の喪失状態を灰色の男たちの実存現象として物語ったのである。灰色の男たちは、現象しているだけであって、存在しているのではない、仮象にすぎないということになる。

そしてエンデは、モモと灰色の男たちの本当の意味を、別の本の中でではあるけれども次のように語っているのである。

> **エンデ**　…どうにかして外部世界と内面世界を、もういちど相互に浸透しあえるもの、循環可能なものにしていくこと、たがいを鏡として、そこに映しだし、映し返されている姿が見つかるようにならないと、極言すれば、私たちは文化をすっかり失うことになります。なんとしてでも可能性を見つけ出さなければいけない、それは私にとっての急務です。テクノロジーの外界を変えて、人間の内面世界を映しだしうるものにするか、あるいは人間の内面世界を拡大して、テクノロジーを抱えこむこともできるようにするか？答は私にはまだわかりません。ただ、私は、本を書きながらひたすらその試みをしている。とにかく今のままでは、灰色の男たち、つまりテクノロジーは、モモにできることをできないのです。物語の最後のところで、1回だけやれた。しかしそれは、モモに先導してもらったから可能になったのです。(21)

『モモ』にそえられている口絵は、いかにものどかに見える。しかし実は、この口絵は現代文明のこの危機的状況を描いているのである。勿論、崩れかけた円形劇場の廃墟はモモによって価値づけられている内面世界を表し、その背後からこの円形劇場の廃墟を包囲するように幾重にもはりめぐらされている高圧電流配送用の鉄柱は、テクノロジーによって価値づけられている灰色の男たちを表しているのである。

またエンデは、灰色の男たちの本質を次のようにも述べている。

> **エンデ**　灰色の男たちは、こまぎれ、分解の原理です。彼らにとっては、計算、計量、測定できるものしか現実性をもたない。計量思考を代弁しているのです。計量思考は現代社会をほとんどおおいつくしている。しかし、人間は今、そこからふたたび全体性を見つけだそうとしている。思考における全体性というのは、「質」を問う思考だといえます。「質」は計量できるものではないし、客観化も不可能です。だからといって、「質」は単に主

観的なものでもないのです。「質」とは第三のもの、そしてモモの生きかたも、そこにかかわる。だからモモは、全一なる存在です。(22)

物語『モモ』の中には、もう1人きわめて重要な人物が登場する。それは、マイスター・ホラである。それと、人物ではないけれども、マイスター・ホラの使者として活躍する亀のカシオペイアである。

モモは、前後2回、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉へ訪れることになる。そのうちの第1回目は、次のようなりゆきで実現したのである。それは、モモの時間観によって築きあげられた平和で理想的な人間の世界の中へ、いよいよ灰色の男たちが登場してきてまだ間もない頃であった。彼らは時間貯蓄銀行の外交員として登場し、人々にさかんに、たくみに時間の節約と貯蓄を勧誘した。彼らは目に見えない侵略軍のようであった。彼らはほとんど誰にも正体を見破られずに、彼らの目的をどんどん達成していったのである。ついにある日、彼らの1人が、時間の節約と貯蓄をすすめるために、円形劇場の廃墟のモモの前に姿を現したのである。しかしその灰色の男は、勧誘に成功するどころか、モモのあの不思議な「聞く」力によって、自分たちの秘密を洗いざらい全部白状させられてしまったのである。いわく、日々人間たちが時間を節約して時間貯蓄銀行に預けた時間はけっしてその人の手にはもどらない。なぜならその時間は灰色の男たちが生存のための糧として消費してしまうからだ。灰色の男の数はこれからどんどん数が増える。そのためこれからますます多くの時間を人間たちから騙し取らなければならない。仲間の数を増やし、全人類から時間を全部取りあげ、人間に代わって彼らが世界を支配することが目的である。と、その灰色の男はモモに彼らの秘密を全部もらしてしまったのである。

その数日後の真夜中12時頃、モモを拉致するため、灰色の男たちに総動員令が出されたのである。その夜、モモはどうしたわけか、何かを待っていなければならないような気がしてどうしても眠りにつけなかったのである。その時、何かがモモの足に触れたのである。それは一匹の亀であった。その亀は、モモを灰色の男たちから保護するため、マイスター・ホラが遣わした使者であった。そのカメの名はカシオペイア、言わんとすることが甲羅に文字となってほのかに光り、30分まで先のことはすべて予知できる不思議なカメであった。モモはそのカメに先導されて、廃墟から市中へと歩きだしたのである。灰色の男たちが廃墟のモモの部屋の中へ乱入してきたのは、その直後のことであった。こうしてモモは、カシオペイアに先導されて、庭の中やら地下道やら奇妙な所を通

りぬけながら、無数の灰色の男たちの捜索の手を何回も何回も間一髪の差でかわしながら、それまで一度も来たことのなかったわびしい町はずれに出たのである。そこから横丁に入ると、そこは今までとはすっかり様子のちがう小路であった。

その時は真夜中だったはずなのに、その小路には、朝の光とも昼の光とも夕の光ともつかない光が満ちあふれていた。その光は射し込んでくる方向の定まってない光で、もの影はどれもこれもてんでんばらばら、かってな方向に落ちていた。その通りに入った所には、記念碑のようなものがあった。それは黒いま四角な石の上に、すごく大きな白い卵が一つのせてあるだけのものであった。その通りには、見わたす限り、人っ子ひとりいなかった。犬一匹、猫一匹、車一台もなかった。およそ動きというものがないのである。通りの両側には白い建物が立ち並んでいたが、その中にも人の気配は全くなかった。何よりも不思議なことに、この通りでは、ゆっくりと歩けばゆっくりと歩くほど、早く進むのである。モモはカメの後について、この人っ子ひとり居ないまっ白な通りや広場を、ゆっくりと、しかし早く、進んでいった。やがてカメは角を曲がった。

そこはまた、これまでとはすっかり様子のちがう小路であった。そこは一見して、長い間海底に沈んでいた華やかな王宮都市が地上に浮上したような印象を与える小路であった。その小路の名は〈1度もない小路〉。不思議なことに、この小路では、モモがいくらカメに話しかけても、それは声にはならなかった。それなのに、モモが伝えたいことは、正に以心伝心、直ちに正確にそのカメに伝わるのである。更に不思議なことに、この〈1度もない小路〉では、何もかも逆むきに起きているのである。この小路では、前向きに歩いたのでは1歩も進めないのである。カメのカシオペイアに教えてもらって、後ろ向きになって歩くことにより、モモはようやく進むことができたのである。なぜならばこの小路では、時間が人間世界の時間とは逆方向に流れていたからである。後ろ向きになって歩くことにより、時間をさかのぼっていたのである。この間、頭の中で考えることも逆むき、息をするのも逆むき、何かを感じるのも逆むき、要するに何もかも逆むきにしないと1歩も先へ進めなかったのである。カシオペイアに進み方を教えてもらって、モモはどうにかやっとこの〈1度もない小路〉を進みきったのである。こうしてモモは、人間界の時間の次元を超えたのである。

この小路は袋小路になっていて、そのつきあたりは大きな建物になっていた。真正面には大きなふたつのドアがあり、そのドアの上の方には〈どこにもない館〉という標札がかけてあった。モモが前に立つと、そのドアはひとりでに開

き、モモとカシオペイアが入ると、そのドアはまたひとりでにしまった。こうしてモモは、〈どこにもない館〉の中にたどりついたのである。つまり、モモは人間界の時間の次元を超えたのである。そして今や、〈どこにもない館〉の中の大広間に立っていた。その内部はどんな教会よりも高く、広かった。その広い広間には、無数のろうそくと、無数の時計が飾られていて、その空間は、それらのろうそくの炎の金色の光とそれらの時計のチクチク、タクタク、カチカチする音で満たされていた。この〈どこにもない館〉の「どこにもない」というのは、人間界のどこにもない、という意味であろう。そうすれば、この〈どこにもない館〉とは、人間界の空間の次元を超えた世界にある館ということになる。今やモモは、人間世界の時間の次元を超えているのみならず、人間界の空間の次元をも超えている世界に入り込んでしまったのである。とすれば、今しがたモモが越えてきたあの時間の逆流していた〈いちどもない小路〉は、此岸にある人間界、すなわち魂界と彼岸にある精神界との境にかかっているエンデのいわゆる「橋」だったのである。そして、あのさびれた市街から横丁に入った所にある、光のさしこむ方向がてんでんばらばらな不思議なあの小路は、この彼岸へ通じている「橋」の人間界側のたもとだったのである。そうすれば、この「橋のむこうの世界」にあるマイスター・ホラの〈どこにもない館〉は、当然、彼岸の精神界にある館である。ということになる。

モモがこの〈どこにもない館〉の中で、めずらしい光景に目を見はり、いろいろな時計に見とれていると、どこかからやさしい声が聞こえてきたのである。

「ああ、帰ってきたのだね、カシオペイア！あの小さなモモは連れてきてくれなかったのかい？」

モモはふりかえりました。そうすると置き時計と置き時計の間の狭い通路に、ひとりの銀髪のほっそりした老人が、身をかがめて床の上のカメを見つめている姿が見えました。…

「ここに居ます。」と、モモは大声で言いました。

おじいさんはうれしそうにほほえみながら、両手をひろげて近づいてきました。ところが、1歩近づくごとにその人はだんだん若くなってくるように見えました。とうとうその人が彼女の前に立って、モモの両手を取って、心をこめてふった時には、その人はモモ自身とほとんど同じくらい若く見えました。

「ようこそ！」と、彼はうれしそうに言いました。「本当にようこそこの〈どこにもない館〉に来てくれました。モモ、自己紹介させていただこう。私

はマイスター・ホラ――ゼクンドゥス・ミヌゥトゥス・ホラだよ。」

「ほんとうに私を待っていてくださったの？」と、モモは驚いてたずねました。

「もちろんだよ、私はおまえをここに連れてこさせるために、わざわざ私のカメのカシオペイアをつかわしたのだよ。」…

「カメに私を連れてこさせたのは、なぜなの？」

「灰色の男たちから守るためだよ。」と、マイスター・ホラはまじめな顔で答えました。(23)

これで、マイスター・ホラは人間界を超えた高次元の叡知存在者であり、モモの保護者であることが判明した。この後、マイスター・ホラは、なぜ灰色の男たちがモモを目のかたきにして追い回しているのか、灰色の男たちの正体は何なのかなどのことを語って聞かせる。そして二人で、例の時間についてのスフィンクスの謎遊びをしている内に、時間そのものは一体何なのだろうか、という真剣な疑問に迷い込み、あれこれ考え込んでしまう。結局モモは、時間は音楽のようなものである、という結論に達する。しかしモモは、この自分の結論に全く自信が持てない。それに対して、マイスター・ホラはモモを肯定的に励まして、次のように言う。

「おまえはなかなかいいことを言ったと思うよ。だから私はここでおまえにひとつ秘密をあかすことにしよう。〈いちどもない小路〉のこの〈どこにもない館〉から、すべての人々の時間がやってくるのだよ。」

モモはマイスター・ホラをおそれうやまい、じっと見つめて言いました。

「ああ、そうなの。おじさんが、ご自分で時間を作っていらっしゃるの？」

マイスター・ホラはまたもやニコニコして言った。「いや、そうじゃないんだよ。私は管理人にすぎないのだよ。私の義務は、各々に定められている時間を、その各々の人々に送りとどけてやることだけなのだよ。」(24)

これで、マイスター・ホラの位階と任務は判明した。マイスター・ホラは人間のすぐ上位の叡知存在者で、この時間はＡさんのもの、この時間はＢさんのもの等々、既に宛先の決まっている時間をその宛先の人へまちがいなく届けてやる役職のエンデのいわゆる「叡知存在者」なのである。

では、マイスター・ホラが彼の〈どこにもない館〉で管理しているこれらの時間は、いったいどこから来るのだろうか。マイスター・ホラは次のように言う。

「…これらの時計は、各々の人が各自の胸の内に持っているもののきわ

めて不完全な模造品にすぎないのだよ。というのは、おまえたちは光を見るためには目を持っているし、音を聞くためには耳を持っている、それと同じようにおまえたちは時間を感じとるためには心（Herz）を持っているのだよ、だから、心（Herz）によって感じ取られない時間はもうなくなってしまうのだよ。…」

「もし私の心臓（Herz）が鼓動を打つのを停止したら？」と、モモはたずねた。

「その時は、おまえにとっての時間も停止する。こう言うこともできるだろうね、おまえ自身が、おまえの時間を、昼も夜も、何ヵ月も何年も、どんどんさかのぼって行く。おまえの一生涯を全部さかのぼると、まるい大きな銀の扉にたどりつく、それはおまえがいつかこちらに来るとき一度通ってきたあの扉だよ。こんどはそこを出て行くことになる。」

「その外側は何なの？」

「そこは、ごくかすかだけれどもおまえがすでにたびたび聞いているあの音楽の源なのだよ。でもその時はおまえはその音楽に加わる。おまえ自身がその音楽の中のひとつの音なのだよ。」

ここでモモは、さき程、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉に来る時通ってきた、あの時間が逆流していた〈1度もない小路〉を思い出して、ハッとしてたずねる。

「あなたは、死なんですか？」

マイスター・ホラはほほえんでいるだけで、しばらくは何も言わなかった。それから答えて言った。

「もし人間たちが、死とは何なのか、を知れば、死なんか少しも怖くはなくなるだろうにねぇ。」(25)

モモの質問に対するマイスター・ホラのほほえみと沈黙は、本質的には肯定の表示である。しかし実際には、人によって、場合によって、否定にもなるはずである。ということはこうである。

Aさんがマイスター・ホラから既に実際に受け取った時間が、Aさんが〈1度もない小路〉を通過するのに要した時より大なる場合は、Aさんは〈1度もない小路〉を通過するのに要した時間だけ若返るだけで、Aさんは死には到らない。従って、マイスター・ホラは死ではない。モモの場合は、これにあてはまる。

しかし、Bさんがマイスター・ホラから既に実際にもらった時間が、Bさんが〈1度もない小路〉を通過するのに要した時間より少なる場合は、Bさんは死に

到る。従ってBさんの場合は、マイスター・ホラは死である。これの典型的な場合は、灰色の男たちにあてはまる。灰色の男たちの実存は、人間たちから盗み取った時間の花の葉巻をふかすことによって瞬間の連続によって支えられているだけであって、灰色の男たちには、マイスター・ホラから直接もらった時間は全然ないのである。それ故、灰色の男たちは、時間が逆流している〈1度もない小路〉に少しでも入った瞬間それと同時に、消滅する。実際、モモが2回目にマイスター・ホラの〈どこにもない館〉を訪れた時、ひそかにモモの跡をつけてきた灰色の男たちは、この〈1度もない小路〉に足を踏み入れるや否や、ただちに跡かたもなく消滅したのである。(26)

これはこれとして、マイスター・ホラとは何者であるか、モモがたずねて言ったように、マイスター・ホラとは「死」なのかということについて、エンデは他の本の中で次のように述べている。

エンデ　人びとがもう少し余暇を必要とするのではないか、ピンポンをしたり、そのほか趣味のための時間を確保しようとか、そんなことを私は問題にしてはいません。人間から時間が疎外されていくのは、いのちが疎外されていくことであり、そう仕向けていくおそろしい力が世界にある。しかし一方には、別の力がはたらいており、これが人間に治癒の作用を送ってくる。と、そこまでを暗示したつもりです。

子安　あのマイスター・ホラの場面でしょう。あれこそ、ほんとうは『モモ』を書いたエンデさんの心中にあった、と私は見ているのですけれど。

エンデ　そうです。見方によれば、マイスター・ホラは死だともいえる。モモはじっさいにたずねますね。「あなたは死なの？」と。すると彼はしばらくだまってから、「もし人間が死とは何かを知っていたら、こわいとは思わなくなるだろうに。」と答える。彼は、私たちにこの地上の生のための時間を、死の彼方から賦与する力を統べています。そして私たちの1時間、1時間は、全宇宙が、太陽も、月も、はるかな星々も、すべてが作用しあって贈ってくれるものなのです…。(子安美知子著『エンデと語る』朝日新聞社126～127ページ)

ということが、エンデの時間観なのである。

それはそれとして、話を再びモモとマイスター・ホラとの会話の場にもどすと、死なんか怖くないというモモに、マイスター・ホラは時間の源を実際に見せてやることにしたのである。

モモが人間界からマイスター・ホラの〈どこにもない館〉へやって来た時は、

カメのカシオペイアの教えと導きによったとはいえ、ともかくも自分の足で歩いてきたのであるが、ここから先はそうは行かなかった。モモはマイスター・ホラに抱き上げられ、彼の手でそっと両目を閉ざされた。それから、長い廊下を歩いているように思われた。初めのうち、モモには自分の心臓の鼓動の音を聞いているように思っていたが、やがてそれはだんだんマイスター・ホラの足音のように思われてきた。それは長い道のりだった。どうやら、ついに、さき程話で聞いた「人生への銀の門」をくぐりぬけ、外に出たらしかった。モモは、そっと、どこかにおろされたのである。この廊下が、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉から更に先の異界へ行くいわゆる「橋」であった。

モモは、目を開けると、大空と同じくらいあろうかと思われる程大きい黄金の丸天井の下に、黄金色のうす明かりの中に立っていました。

高い高いその丸天井の中心部分にはひとつの開口部分がありました。その開口部分からは、1本の光の柱がその真下の同じくまん丸い池に垂直にさし込んでいました。そのまっ暗な池のまっ黒い水面は、まるでまっ暗な鏡のようにつるっつるで、微動だにしませんでした。

その水面のすぐ上の方には、まるで明るい星のように、何かがその光の柱の中で輝いていました。それはおごそかにゆっくりと動いていました。それはまっ暗な鏡の上を行きつ戻りつしているとてつもなく大きな振り子でした。しかしそれはぶらさがっているのではありません。重さのないもののように宙をたゆたっているのです。

この星の振り子が池のへりに近づいてくると、そこにまっ暗な水の中から大きな花の蕾が姿を現しました。振り子が近くに来るにつれ、ますますその蕾はふくらんできて、ついには満開となって水面の上に立っていました。その花は、モモがそれまでに見たこともない程美しい花でした。それは光り輝く色そのもののように見えました。…

やがてまた振り子は、ゆっくりと、ゆっくりと、もどって行きました。振り子がゆっくりと遠ざかって行くにつれて、驚いたことに、その美しい花はしおれ始めたのです。花びらが1枚、そしてまた1枚と散って、まっ暗な深みへ沈んで行きました。…

振り子がまっ暗な池の真ん中まできた時には、さっきの美しい花はすっかり散ってしまっていました。しかし同時に、そのむこう側には、またひとつの蕾がまっ暗な水の中から顔を出しはじめていました。そして振り子がゆっくりとそれに近づいて行くと、そこにはさっきよりももっと美しい花

が咲きはじめたのです。…

この花はさっきの花とは全く別の花でした。この花の色も、モモは見たことがありません。しかしモモには、この花のほうがはるかに豊かで豪華なように見えました。…

しかし再び振り子がひきかえし始めると、その美しさはうつろい、散って、その花びらは、1枚、また1枚、まっ暗な池の底なしの深みの中へ沈んで行くのです。…

こうして見ている内に、新しく咲いてくる花はすべて、前に咲いた花とは別の花であり、そして今咲いている花がその都度その都度、一番美しい花であるように思えてくるのだ、ということがモモにわかってきました。

今モモが目にしたこれらの花が、他でもない、モモ自身の時間の花だったのである。後でマイスター・ホラに教えてもらったところによれば、人には1人1人誰にも、このような自分自身の時間の花が生じてくる所があるという。モモはついに、自分の時間の源を自分の目で見たのである。

こうしてモモが自分の時間の花が生じては散って行く様子を見ているうちに、ここではまた別のことも進行しているのにモモは気づいたのである。

丸天井の真ん中から射し込んでくる光の柱は、見えるだけではありませんでした —— 今やモモにはまた、聞こえはじめたのです！はじめはそれは、遠くの樹木のこずえにたわむれる風のざわめきのように聞こえてきました。しかしそのざわめきは次第に大きくなって、滝の音が岩に打ちよせる大海原の波のとどろきのようになりました。

よく聞いているうちに、このとどろきは数えきれない程たくさんの音が響き合ってできているのだということがわかってきました。それらの音はたえず新たに調整しあい、変化しながら、たえず別のハーモニーをつくり出しているのです。それは音楽であり、同時にまた音楽とは全く別のものでした。突然モモは気づきました。以前、時々、星のきらめく夜空のもとで静寂に耳を傾けていた時、かすかに、そしてまたはるかかなたから聞こえてくるかのように聞こえてきたあの音楽は、他でもないこの音楽だったのだということにモモは気がついたのです。

ところが今は、これらのひびきがだんだん明確になり、だんだん光り輝いてきたのです。モモはこんな気がしました。この響きわたっている光こそ、今しがた見たあのどれ一つとして同じもののない、1回限りで繰りかえしのない花を、暗い池の底から呼び出してかたちづくっている当のものではな

いのでしょうか。長い間耳を傾けているにつれて、その一つ一つの声をだんだんはっきりと聞き分けることができるようになってきました。
しかしそれは人間の声ではなく、金や銀、その他ありとあらゆる種類の金属が歌っているかのように聞こえてきました。そうするとすぐその後に、筆舌につくしがたい力強い全く別な種類の声が、考えられない程遠くから聞こえてきました。その声がだんだん明確になってきて、それは次第次第に言葉となって聞こえてきたのです。その言葉は1度も聞いたことのないものでしたが、それなのにモモはそれを理解することができました。それは、太陽や月、惑星やその他の星たちが、各々自分の本当の名前をうちあけている言葉だったのです。そしてそれらの名前の中には、時間の花の一つ一つを発生せしめ、かつ消滅せしめるために、彼らが何をしているのか、彼らがどのように協力し合っているのか、ということが秘められていたのです。
そしてモモは即座に、これらの言葉がすべてモモに向けて発せられているのだということがわかったのです！はるか彼方に到るまでの全世界が、考えられない程巨大なたったひとりの顔となって、モモの方に向いて、モモを見つめ、モモに語りかけていたのです！
そして、恐怖よりも更に大きい何かが、モモに襲いかかってきました。その時、マイスター・ホラが手まねきしているのが目に入りました。モモは、彼の方へ駆け寄って行きました。彼はモモを抱き上げてくれました。モモは、彼の胸に顔をうずめました。彼がふたたび彼の手で、雪が降ってくるようにふわぁとモモの目を覆うと、暗くなり、そして静かになりました。
そしてモモは、救われたようなやすらかな気分になりました。こうして彼はモモを抱いたまま、長い廊下を通って帰ってきたのです。(27)

こうして、〈どこにもない館〉に帰ってきて落ち着いてから、マイスター・ホラは、モモがさっき見たり聴いたりしたあの時間は、他の人々の時間なのではなく、モモ自身の時間であったということや、あの時間は普通の目では見ることはできないのだということなどを語り教えられたのである。そうすれば、モモは霊視能力と霊聴能力の持ち主であるということになる。続いて、モモはたずねる。

「私はいったいどこへ行ってきたのですか？」

「おまえ自身の心の中だよ。」と、マイスター・ホラは言いました。(28)

そうすれば、長い廊下のむこうの世界、いわば「橋のむこうの世界」にあっ

たあの池も、あそこで対面した大宇宙のあの顔も、「心の中に」、つまり精神界の中に存在しているのである。とすれば、〈どこにもない館〉のある精神界の彼岸に、更に高次元の精神界が存在していることになる。そこへは、さすがのモモも自分の足で歩いて行くことはできなかったのである。マイスター・ホラに抱いてもらってやっと行って帰って来ることが出来たのである。そして、行く時も帰る時も、マイスター・ホラにそっとまぶたを閉ざされた。ということは、モモ自身が眠りに陥ったことを示唆している。そうすれば、モモが霊視した時間の花も、モモが霊聴したあの時間の音楽も、夢の中の夢の出来事だったのである。しかし、エンデの主張によれば、あらゆる精神界は客観的に現実に存在しているし、精神界の中でのあらゆる出来事も客観的な現実の出来事なのである。つまり夢の中の出来事も、夢の夢の中の出来事も、すべて客観的な現実なのである。このことを理解するためには、もはや言葉はたいして役には立たない。直接体験するしかないのであろう。

こうしてモモは、自分自身の時間の花が生まれてくる黄金の光が射し込んでいるまっ暗な池を見せてもらったのみならず、その時間の花一つ一つを発生せしめ、成長せしめ、言うに言えない程美しい花を咲かしめ、その花びら１枚１枚を散らしめ、底知れぬまっ暗な池の底へ沈み込ませている叡知存在者と真正面から顔を合わせることができたのである。この叡知存在者は、宇宙全体にあるすべての星々が、各々自己の力を発揮しつつも互いに協力し合い、調和し合い、全体としてはひとつの明確な意志の力を発揮している叡知的存在であった。物語『モモ』における世界の高次の次元の限界は、ここできわまっているのである。マイスター・ホラは、この最高次元の宇宙的叡知存在者の不完全な似姿・模造なのである。

黄金の丸天井の中央部分の開口部からまっ暗な池の中へ射し込んでくる黄金の光の柱は、正にこの宇宙的叡知存在者の明確な意志とでも言うべきものである。あるいは、形成力とでも言うべきものである。この黄金の光の柱は、全宇宙にあるすべての天体が各々自分の音を発しながら集合し、協力し合い調和し合いながら響きあっている言うに言えない程力強い響きを発しているのである。それは、いわば大宇宙の大交響楽とでも言うべきものである。マイスター・ホラの説明によれば、この黄金の丸天井の下のまっ暗な池にたどりついた者は、ここでひとつの音と化すといっていたのである。そうすれば、今聞いている大宇宙の大交響楽の中に、モモ自身も一つのパートとなって参加しているはずである。この大交響楽に耳を傾けているうちに、モモはその大交響楽の一つ一つ

のパートを明確に聞きわけることができるようになったのである。更に注意深く聞いているうちに、その一つ一つの音の意味まで理解することができるようになったのである。今やモモにとっては、この大宇宙の大交響楽は大宇宙の語る言葉そのものであった。しかも、大宇宙はモモに面と向かって直接語りかけてきたのである。驚くべきことに、モモはその大宇宙の言葉を理解することができたのである。大宇宙は、各々の人に、その人ひとりのための言葉を語るはずである。モモに対しては、モモひとりのための言葉を語ったはずである。大宇宙はこの時、モモに対してどんな言葉を、何を、語ったか。このことに関しては何もふれられていない。しかし、大宇宙はモモに対しては「憧れ」の言葉を語ったはずである。「憧れ」の言葉で、「愛」、「希望」、「信念」および「空想」を語ったはずである。今しがたモモが池の端でまのあたりに見たあのえも言われぬ美しい時間の花は、この「憧れ」の言葉によって発生せしめられ、生育せしめられ、開花せしめられた花だったはずである。こうしてモモの時間は、ここから再び始まるのである。

子安美知子氏はこの点にふれて、エンデに次のように言っている。

子安　…それからモモは、いよいよ「時間の花」を見ます。永劫に一輪咲いては散り、また一輪新しく咲く。ここにはっきり、人間は転生するという思想がのぞいていますね。

エンデ　ただ、誤解しないでください。私はけっしてその思想を知らせる意図で、あれを書いたのではありません。もちろん、その問題をすでに十分考えつくした人に向けてだけ、いわば思想の共有のためにだけ書いたのではありません。私は、もっとだれにでも語りかける気持ちで書いたのだし、そこに芸術が持つ可能性のひろがりがあると思います。

文　それでなければ困ります。

エンデ　ブレヒトの話のときにも言いましたが、私は文学作品に教訓をしのばせる意図を捨てています。作品そのものは、なんの注釈も必要としない。ただそのままの姿が人を納得させなければいけない。…(29)

性懲りもなく注釈を加えれば、エンデはここでも輪廻転生を否定しているわけではない。輪廻転生は、エンデの確固たる世界観なのだ。『モモ』の中の時間は、正に輪廻の構造を形成しながら永劫に続いているのだ。この輪廻のテーマは、『モモ』においてのみ語られているのではない。『モモ』の後に出版された『はてしない物語』は、正に輪廻の輪をたどってはてしなく続いていく物語なのである。一匹の巨大な白い蛇ともう一匹の巨大な黒い蛇が、互いに相手の尾

を飲みこみあい、巨大な輪をなし、その中央に命の水の噴水を守っている。[30]正にこれは、輪廻の芸術的表現なのである。

エンデは、『闇の考古学』の中でも次のように語っている。

エンデ　…つまり人間は、死んでから別の姿で存在しつづけるだけではなく、もちろんそれと同じように、生まれるまえにも、いいかえればフィジカルな姿をとって現在のように生きるまえにも、すでに存在していたのだ、と考えるのです。

いいかえれば転生です。それは古代のあらゆる宗教では自明でした。聖書も、転生を自明のこととして語っています。転生はしだいに神学者たちの努力によって影が薄くなり、彼らは転生についてずっと沈黙を守っています。しかしたとえば、イエスに弟子たちがはっきり質問しています。「このバブテスマのヨハネは前世では誰だったのですか」。するとイエスは答えて、「エリヤだったのだ」と言う。つまり転生がまったく論じられなかったのは、それがまったく自明のことだったからなのです。仏教にも転生はあります。ユダヤ神秘説のカバラにもあって、そこではギルグルと呼ばれています。転生はいたるところに存在している。あらゆる時代において周知の事実だったのです。[31]

『モモ』の中でも、『はてしない物語』の中でも、時間には常に、生の方向へ流れている時間と死の方向へ流れている時間があって、世界全体から見れば、この二つの時間は相互につながり合って円環をなしているのである。モモは、マイスター・ホラによって一時的にこの時間の円環の外側につれ出してもらい、この時間の円環を外側から見せてもらったのである。

物語『モモ』の中に登場する人物？の中で、いま少しその正体がはっきりしていないのは亀のカシオペイアだけである。マイスター・ホラの使者としてモモのところに現れ、モモを灰色の男たちから救い守るためにひと働きもふた働きもするカメ。言わんとすることを光る文字にして自分の甲羅に浮きあがらせるカメ。30分まで先のことなら何でも知っているカメ。人間界よりもう一段階高次元の世界にあるマイスター・ホラの〈どこにもない館〉へ自力で自由に行き来することのできるカメ。このカメは確かに人間から見れば高次元の世界のいわゆる叡知存在者であることはまちがいない。

しかしこのカメは、どの世界あるいはどの位階に所属する叡知存在者なのだろうか。またその存在の位階から見て、マイスター・ホラとはどういう関係に

あるのか。これを知る新たな手掛かりは、『モモ』の中では、あと1ヵ所にあるだけである。それは次のような状況の中で与えられている。話はすすんで、やがて人間界は、灰色の男たちに完全に占領される。モモは孤立無援、灰色の男たちに包囲され、激しくせめたてられる。この夜、モモはふたたびカシオペイアに導かれて、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉へのがれる。そこでマイスター・ホラは、灰色の男たちを消滅に追い込む戦略をモモにさずける。但し、モモがその戦略を実行し、灰色の男たちを消滅に追い込むためについやすことができる時間は、たった1時間だけである。その1時間は、1輪の時間の花としてモモに与えられる。いざ出陣！モモが人間界へ戻って行って人間界で灰色の男たちと戦う時、モモのそばに居てモモの味方をしてくれるのは、カメのカシオペイアだけである。そこで、モモはマイスター・ホラにたずねる。

「カシオペイアも時間の花をもらえるの？」と、モモはたずねました。

「カシオペイアはいらないんだ。」と、カメの首すじをやさしくなでながらマイスター・ホラは言いました。「カシオペイアは時間の圏外で生きているんだ。カシオペイアは、自分自身の中に自分だけの時間を持っている。だから、たとえ何もかも永遠に静止しても、カシオペイアは世界のはてまでだって行けるんだよ。」(32)

カシオペイアは、マイスター・ホラから時間を分配してもらっている存在ではないのである。従って、カシオペイアの存在は、マイスター・ホラに依存しているのではない。更に言えば、カシオペイアの時間は、モモが見せてもらったあの黄金の丸天井の下の池から生まれてくるのでもないし、あそこで聞いた大宇宙の音楽＝言葉によって発生せしめられる時間でもない。「自分自身の中に自分だけの時間を持っている」とは、いったいどういうことであろう。カメについてのエンデの考えは、『闇の考古学』の中で、次のように述べられている。

エンデ　…これからいうことは、すこし大胆に聞こえるかもしれませんが、ともかく動物を、その生物学的構造とはまったく無関係に、観相学的にとらえてみる。つまり、この動物はいったいなにを表現しているのか、考えてみようと思うわけです。そしてカメをじっと見つめていると、カメというものは歩く頭蓋である、ということに気がつくでしょう。人間の頭蓋とそっくりです。そしてかりに頭蓋が自立して、世界を歩きまわれるようになれば、それがカメなのです。ところで頭蓋は神話ではまったく特別の存在です。北方神話で星空は、氷の巨人の頭蓋からつくられます。そしておもしろいことに、すべての神秘的な流派において、頭蓋と星空にはつ

ながりがあります。

人間において頭蓋であるもの、つまりミクロコスモスにおいて頭蓋であるもの、それがじっさいマクロコスモスにおいては宇宙であり、星空なのです。そしてその星空をカメはこの世で、より小さなミクロコスモスとして背負って歩き、その代理人となっているのです。(33)

つまり、カシオペイアは頭蓋であり、小さなミクロコスモスだというのである。たとえミクロコスモスであれ、コスモスである。従ってカシオペイアは、モモがマイスター・ホラに抱かれて連れていってもらい、黄金の丸天井の下のまっ黒の池の端で対面したマクロコスモスと大小の差はあれ、同類の次元に位置する叡知存在だったのである。モモがあの池の端で対面したあのマクロコスモスは、モモやその他の人間たちの時間の花を発生せしめる始動因であった。それと同様に、カシオペイアの頭蓋、つまりミクロコスモスは、カシオペイア自身の時間が生ずる始動因なのである。つまりカシオペイアは、自分の中に自分自身の時間の始動因（第一原因）を持っているのである。これが、「自分自身の中に、自分だけの時間を持っている」ということの意味だったのである。

結論

結局、『モモ』の中には、自己の時間を他者に依存しないで持っている最高位の次元の叡知存在は合わせて4体存在することになる。そのひとつは、天上界の色ガラスの城の主、モモ姫。もうひとつは、黄金の丸天井の下の池の端でモモが対面したマクロコスモス。そしてもうひとつは、ミクロコスモスとしてのカシオペイアである。これに加えて、マクロコスモスの不完全な似姿・模造であるマイスター・ホラ。これら4体が、精神界、ないしはR. シュタイナーの言う霊界の住人である。

これと次元を異にする人間界、ないしはR. シュタイナーの言う魂界の住人は、永遠の生命を捨てて下界へおりてきて円形劇場の廃虚に住みついたモモ、それから巷の人々であるニノやニコラ、ジジとベッポおよび子供たちである。このうち、ニノやニコラ、ジジとベッポ、および子供たちは、環境に影響されて精神界に近い魂界に住まうことにもなるし、物質界に近い魂界に住まうことにもなる。灰色の男たちは、実際には居るけれども、本質的には存在しない。つまり、現象はするけれども存在はしない。灰色の男たちは、現象する時は常に物質界に直接に接している魂界領域においてのみしか現象しない。

物質界は、灰色の男たちの価値観の土台としては存在しているけれども、こ

の物語が展開される主要な場とはなっていない。

時間の構造については次のように言える。時間は大宇宙の黄金の光の柱＝大宇宙の音楽＝大宇宙の言葉が、始動因（第一原因）・質料因および形相因となって、黄金の丸天井の下の池の中で、時間の花として形成される。ここで形成された時間の花は、マイスター・ホラの〈どこにもない館〉で管理されて、マイスター・ホラによって人間へとどけられる。人間にとどけられた時間の花は各々の人々の生活となる。その人が死ねば、その人の時間は逆流して、まずは〈1度もない小路〉をさかのぼり、更にマイスター・ホラの〈どこにもない館〉を通過して、更に、長い廊下を通りぬけてあの池のある大宇宙に到る。そしてそこで、時間は大宇宙の黄金の光の柱＝大宇宙の音楽＝大宇宙の言葉となる。この大宇宙の黄金の光の柱は、そこにある巨大な丸天井の中央にある開口部分からその真下にある池の中へ垂直にさし込んで、その池の中で時間の花となって転生する。この時間の花から人々の日常生活へと流れる時間と、人々の日常生活から時間の花へと逆流する時間の流れは相互につながっていて円環をなしている。この円環をなして流れる時間を管理しているのは、マイスター・ホラである。

この物語の中のモモの役割は三つある。その一つは、天上の世界から、つまりR. シュタイナーの言う霊界から、人間界へ「憧れ」をもたらし、そしてそれを人々の個性に応じて、「希望」、「愛」、「信念」、「空想」の徳として開花せしめ、復活せしめたことである。モモのこの働によって、人間の時間＝生活は健全なものとなり、生気の満ち満ちたもの、理想的なものとなったのである。

もう一つは、肉体を持って生きている人間界の人間を死後の世界とも言うべき精神界へ案内し、この世の我々に死後の世界をも含めて世界の全体構造を開示してくれたことである。それによれば、世界は、精神界（R. シュタイナーの言う霊界）、人間界（R. シュタイナーの言う魂界）、および物質界から構成されている一つの有機体なのである。

最後にもう一つは、我々人間界の人間に、時間の流れの全体像を開示してくれたことである。それによれば、時間は精神界、人間界、および物質界を貫いて円環をなして永遠に循環しているものなのである。すなわち時間は輪廻して流れている。全世界を人体にたとえて言えば、――ただし、次元の高低は度外視する――　時間は全身をくまなく循環している血液のようなものである。そうすれば、マイスター・ホラは人体の心臓にたとえることができるであろう。

注

(1) Michael Ende »MOMO« 1993年 Thienemanns Verlag 57ページ
(2) 同書159ページ
(3) 子安美知子著『「モモ」を読む』 学陽書房 123～124ページ
(4) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社（朝日選書306） 71～72ページ
(5) 同書 130～132ページ
(6) これについては、拙著「ミヒャエル・エンデ『モモ』における時間の本質について」（「静岡大学人文学部 人文論集」第53号の1 2002年7月）を参照されたい。
(7) Michael Ende »MOMO« 1993年 Thienemanns Verlag 49～53ページ
(8) 同書 14ページ
(9) 同書 15～16ページ
(10) 拙著「ミヒャエル・エンデ『モモ』における時間の本質について」（静岡大学人文論集 第53号の1）参照
(11) 「時間は生活である。そして、生活は心の中に宿っているものである。」»Zeit ist Leben. Und das Leben wohnt im Herzen.« (Michael Ende »MOMO« 1993年 Thienemanns Verlag 57ページ）という命題は、『モモ』全体を貫いている最も根本的な命題である。
(12) 子安美知子著『「モモ」と語る』 学陽書房 20ページ
(13) Michael Ende »MOMO« 1993年 Thienemanns Verlag 21～22ページ
(14) 同書 57ページ
(15) 同書 41ページ
(16) 同書 94ページ
(17) 同書 67ページ
(18) 同書 80ページ
(19) 同書 182ページ
(20) 同書 152～153ページ
(21) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社 122ページ
(22) 同書 123ページ
(23) Michael Ende »MOMO« 1993 Thienemanns Verlag 145～149ページ
(24) 同書 159ページ
(25) 同書 159～160ページ
(26) 同書 234ページ
(27) 同書 161～164ページ
(28) 同書 165ページ
(29) 子安美知子著『エンデと語る』 朝日新聞社 128ページ
(30) Michael Ende »Die unendliche Geschichte« Thienemanns Verlag 1979年 413ページ
(31) エンデ著作集17『闇の考古学』 丘沢静也訳 岩波書店 150ページ
(32) Michael Ende »MOMO« Thienemanns Verlag 1993 245ページ
(33) エンデ著作集17『闇の考古学』 丘沢静也訳 岩波書店 219ページ